

アマヤドリ2014 「悪い田」の三部作 第一弾

『ぬれぎぬ』

作：広田淳一

執筆期間：2014. 02. 04-

【戯曲について】

◎執筆の方針

- セミパブリック、に代わる新しい劇空間をテキスト、演出の画面から構築すること。
- 2014年、東京にて初演する。

◎戯曲世界の設定

- とある過疎化した日本の一地方。リバータリアンの行政特区でこの劇は起きる。
- 戯曲内に出てくる犯罪取り締まりについては基本的には2014年、日本国の刑法に基づいて審理が行われていると想定するが、すべてがそれ通りではない。刑務所は基本的に民営化されており、それぞれの刑務所によりさまざまな特色を出していること。

◎想定している装置

- 机。イス。ソファ。ホワイトボード。

◎表記について

- 「……」は時間的な「間」を表現する場合と、意味的な断絶を示す場合とがある。
- 「／」スフィッシュ記号は間を空けずに話題が切り変わる場合に使用する。
- 「※」がしいた後のト書きは戯曲上の文言ではなく、演出家のメモである。
- ()のようにな セリフ中の括弧内の文字は発音されない。

【登場人物】

- 向井 …… (33) 人材派遣会社「ニンゲン」に所属する派遣社員。男。
- 有島 …… (30) 人材派遣会社「ニンゲン」に所属する派遣社員。元・法務官僚。女。
- 門田 …… (26) 殺人犯として収監されている男。
- 佐野 …… (24) 門田の凶行による被害者の、姉。
- 占部 …… (40) 安楽死殺人の犯人として収監されている女。
- 村田 …… (24) ソーシャル・ケア事業関連会社「キョウセイ」の本社正社員。「キョウセイ・リンク」に出向している。新人女性。
- 遠藤 …… (33) 「キョウセイ・リンク」の事業所・所長。社員。男。

【エピソード】

伝統的個人主義をいわゆる原子的個人主義として見れば、全ての人間に備わっている理性というようなものによってへへへへと壊れてしまう。ですから、啓蒙の個人主義をつきつめていくと類的人間になるんですよ。そういう普遍的理性によってへへへへと壊れない個、ギリギリの、世界に同じ人間は二人いないという個性の自由は、むしろ、啓蒙的個人主義に抵抗したロマン主義が依拠した「個」です。この西欧的な個人主義に内在する矛盾の問題は、よく自身も解決がつかない。

丸山眞男

【0】

▼音響：客入れ音楽はナシ。雑踏の音。

舞台上、無音。

うっすらと明かりが舞台上に灯っている。

深夜のオフィス。

やがて舞台上に一人の女（有島）が登場。スーツ姿。ビジネス用のバッグを持っている。有島は机の前に座り、バッグから書類を取り出して仕事に手をつける。

舞台上、別の場所に一人の男（向井）が登場。

向井は携帯電話を手に取り、誰かに電話をかける。

有島の携帯電話の着信音が鳴り、有島が電話に出る。

有島 はい、もしもし？

向井 ああ、りえぴょん？ りえぴょんかいこの電話これ？

有島 当たり前でしょ。

向井 なにまだ会社？

有島 うん、そうだけど。

向井 今日も泊まり？

有島 いや、いったん帰りたいとは思ってんだけどね、

向井 ああ、そう？

有島 着替えもって来てない。。っついでに言っとなんか。

向井 いや、いいんだけどね。あ、そう。帰っついで？

有島 うん。なに、どうかした？

向井 いやー大変ですね。遅くまでお仕事。

有島 なに？（笑）

向井 いや、びっくりしたーホント。もう、かなり怖めだった、今日の。

有島 ああ、また夢？

向井 うん。なんかすーごい緊張感あった。いやー、もうホントね、今日はちょっと、かなり怖めだったなあ。

有島 どんな夢？

向井 え、いや、なんかいつものまた、おんなじなだけじゃ。

有島 前に住んでた所？

向井 うん。多分そうだと思う。「ああ、またここに戻って来たんだな」って思って。なんかねえ、よくわかんない地下鉄の駅みたいな場所にいるんだけどね俺が。

有島 うん。

向井 こう、ホームのベンチに座ってたのよ、スーツで。それで「ああ、おでん買いたいなあ……」って思った。

有島 おでん？

向井 おでん、おでん。というのもね、まっ白なはんぺんを買ってそれをまっ白な子猫に与えたらどうなるだろうかと、そう考えてまして。こう、おいしいはんぺんをうまく食べられない子猫とはんぺんとお互いモフモフして、モフモフと格闘するモフモフみたいな？ モフモフ名人戦みたいなの？ さぞやかわいいだらうなと思って。ラブリー。キュート。応えられない愛らしさ。

有島 それを考えてたわけね、ベンチで。

向井 そう。そこに電話がかかってくるわけよ。プルルルって。出るわけ俺。「あ、もしも……」かなんか言ってる。それでも鳴り続けてんの、携帯。あれ？ と思ってもう一回ちゃんとポタン押さなくちゃと思って画面を見たら、「あ、もしも……俺、俺……」って隣に座ってた兄ちゃんがスツーツと席を立てて。はい、着信音止まりましたけど？ 俺じゃねーって。……怖かったあホント。

有島 全然怖くないじゃん！ え、大丈夫、ねえ？

向井 大丈夫大丈夫。あ、ごめんね。まだ仕事あんのに、深夜にすみませんでした。

有島 え、それだけ？

向井 それだけ。うん。それだけの男ですから。自分。

有島 なんだよもう……。

向井 いやもう、それだけの男なんで。

有島 じゃあ、もうほら、明日も早いんだしや。

向井 あ、つなががされてる……。こっぴで通話終了のホイッスルかー？

有島 なんなのちよっつ。

向井 わかりました。それだけの男はもう、屁んこいて寝ます。

有島 うん、屁んこいて、そう。

向井 あのさ、りえびん——最後にもうひとつだけ、もし俺がね、

有島 うん。

向井 その、以前にたどったか、わかんないけどその、以前にたどったか引き戻されちゃったとして、でも、会いに来てほしいわね？

有島 行けるといってたじ。

向井 論理的。確かにね。行けるといじゃなかったら来れないもんね。登りたいと思っても、誰もかがマッキンリーに登れるわけじゃないからね。

有島 マッキンリー？

向井 じゃ、会いに来てよ。来れるといってたじ、ななぬんすへ。

有島 行く行く。じゃあ、おやすみね。

向井 うん。じゃあ、りえびんも無理しないこと。

有島 はい。

向井、電話を切って、観客席に向けて話を始める。

向井　えー、とかなんとか言ってるのについていたわけなんですけどね、結局、その晩はまんじゅうもせず夜明けを迎えることになりました。……」「まんじゅうってなんでしょうかね？」「まんじゅう……ちよっとやさしい感じしますね。しませんか？　しませんね。すみませんね。いや、とにかく。次の日もまた、僕もりえぴょんも朝から仕事でした。

場面転換。

門田の場合 1 出勤

出勤風景。

電話の音があちこちと行き交っている。

だんだんと呼び出し音が消えていき、ひとつだけその音が残る。

一人の男（遠藤）がその電話に出る。

遠藤 あい？

有島 あ、もしも有島です。すみませんでした、出られます。

遠藤 いしほでも出られるか？

有島 はい、申し訳ありません。

遠藤 でなに、着いたの？

有島 はい、今、着きました。

遠藤 ああ、そう。

有島 これから所内に入ります。

遠藤 ん、そんなじゃ行ってらっしゃい。

有島 はい、行ってきます。失礼します。

遠藤 はい。がんばって。

有島、電話を切る。

場面転換。

門田の場合 2 面談

ソーシャル・ワーカーとの接見室。

二人の人物（有島、門田）がイスに座っている。

有島が二人分のお茶を注いでいる。

門田は辺りを見回っている。

有島 かえって落ち着かないでしょ？

門田 え？ ああ……。

有島 しほはアクリル版見たの？

門田 ああ……アクリル版。

有島 今回の話から使われるようになった言葉は、門田さんとは安全な話だということになり、許可がとれました。……「えー、今回の面談は……」。じゃあめまじりあつち、ちいとお願ひです。

門田 (力の入った様子)は。ちいとお願ひです。

有島 あ、ちいとお願ひ、ちいとお願ひ……。ちいとお願ひ……。

門田 ちい……

有島 ちいあつち、ちいあつち、ちいあつち……。結構いいですね。結構いいですね。結構いいですね。結構いいですね。結構いいですね。……。

門田 ちい……。

有島 えー、ちいとお願ひ、ちいとお願ひ、ちいとお願ひ……。

有島、書類を探る。

門田 控訴するつもりです……。

有島 (書類から目を離さず)あ、あ、控訴はね……お願ひです……。

別の場所で向井の独白が始まる。

向井 僕は、人材派遣会社の「インゲン」でアルバイト務めている、向井と申します。非正規雇用の、いわゆる派遣労働者です。

有島、取り出した書類のページをパラパラとめくります。

有島 あ、そうだ、門田さんがね、えー、公判の中日、「反省すべき点は何も無い」という意味のことを繰り返して……。

をお話していただきましたね……。

門田 まあ、は。

有島 ちいあつち、ちいあつち……。

門田 ちい。だからね、ちいあつち……。

有島 ちい。ちいあつち……。

問。

有島 ……「ちいあつち、ちいあつち……」。ちいあつち、ちいあつち……。

有島、再び「パピー」をみる。(※「パピー」)

有島、再び「パピー」をみる。(※「パピー」)

向井 「ニンゲン」てのが僕の登録してる会社の名前なんですけどね……いや、いくら人材派遣だからって「ニンゲン」はねえだろって話なんですけどね。僕がその「ニンゲン」から派遣をれまして、現在務めているのがこの「キョウセイ・リンク」って言う会社なんですけど、「リンク」またニンゲンに輪をかけて、フランクな香りが漂う職場でして……。

有島 えーとね、門田さんはその「愛」の結果になりました。「とまあ、そういう意味のことをおっしゃってるわけなんですけど……そのオ、ま・普通に考えますとね、愛しているんだってまあ……その人の可能性を奪うようなことはしないんじゃないかなあって思ったりもするんですけど……どうなんでしょう、そのあたり……」

門田 愛しているんだって、普通はどいするんですか？

有島 そりゃあ……分ち合おうとするんじゃないですかね。愛を。人生を。未来を。

門田 僕がやったことはそれです。

有島 でも、門田さんは結果として彼女の将来を奪ってしまった……。それは「分ち合おう」「とていつかは別の」となじゃ無いかなあ、とも思ってますけど。

門田 命を分かち合った、とは言えませんか？

有島 いや、なにがそんなに言っているんですか (笑)

有島、冗談ぽく笑う。門田は笑わない。

有島 言っていないですよね。うまいとは別に言っていない……。

向井 安月給だったのにサービス残業は基本だし、有給なんか取っているひと見たこと無いし、なんだったら定休だってガンガンに削ってきますもんね、

向井 それなんだよ。って、これは最近うちの事務所に来た村田玲奈ちゃん。

村田 だいたいシャワーと寝袋が常備されている会社って、おかしいと思いませんか？

向井 要するにそういう会社でした。玲奈ちゃんは……の先輩だったのに「キョウセイ・リンク」の親会社である「キョウセイ」本体からのいわゆる本社出回で来ているがゆえに僕の

向井・村田 上司……

向井 はじめから、のっけから、ハナっからの

向井・村田 上司……

向井 っつっつ、ちゅっつ複雑な先輩です。

村田 単純です。

有島 えー、えー、あなたかやっただのは奪。なんだじゃあないかな、とまあ思っていますよ。奪。分ち合おうって、分ち合おうって別の別の……。奪。

門田 ……嬉しいが、わかつたはせは……。

有島 ええ、普通に名前を呼んでいただけで結構です。」「名前を呼ぶだけじゃなく」とか言ってますのよ。

門田 あ、はい。有島さん。
有島 はい。

お土産のお饅頭の小さな包装を開ける門田と有島。

向井 む、このこの、有島さん、と僕はあの、職場結婚と申しますか、「妻」って言いちゃうじゃないですか、過激じゃないですか、

村田 ええ？

向井 みなさんの感覚でいうとこのいわゆる「妻」みたいな、そういう存在だと思っていただければ大体、間違いないかと思えます。ってなんかちょっと曖昧な言い方になってますけど、それってこのお饅頭の味をいじりますか、

村田 この、特区じゃ、

向井 以前僕が住んでいたところみたいな「結婚」っていうシステムが無くなっているからなんです。だから僕とびえびえは一緒に暮らしてはいるんですけど、特に役所に届けを出さなくてもなく、そのこの戸籍上の手続きも何もを一切せずに同居してはいます。僕もいるじゃないですか、この、特区じゃ、
向井 誰と誰が結婚してもいいんです。男同士で、とか、女同士で、なんてのはもちろん余裕でオッケイですし、一夫多妻とか多夫一妻とか、拳銃の果てには多夫多妻とか、とってもフリーダムなことになっておるわけです。

門田 僕はあの……。

有島 はい。

門田 二度と顔を見せないで欲しいって言われたんです……彼女の視界に入るなって。しかも本人からじゃない、代理人で人から、メールもするな、手紙も出すな、リアルでもネットでもこれから一生関わるなっつ。

有島 ……はい。

門田 だから分ち合いを拒否したのは彼女です。僕じゃありません。僕は分ち合いがかった。分ち合いがかったんです。分ち合うってなんでしょうか？

有島 えー、というところですね、あのオ、彼女の未来を奪ってしまえばそれをその、自分のものにするんですか、その思ったっていいですかね、自分だけのものにするんですか……。

門田 いくらですか、そんなに？

有島 いや、私が聞いてくるんです。

門田 僕も聞いていますよ。聞いていますか？ 彼女を殺すと自分だけのものにするんですか？ だったら僕は彼女を何度でも殺したい。何度も何度も生き返らしてもいい。何度も何度も殺したい。

有島 (机の上で置いてあるボイス・レコーダーを示して) 門田さんあの、録音、ありますから。

門田 だったらなんでしょうか？

有島 いや………できませんよ、そんなことは。

問。

有島 だからあれですよ、彼女がそういうふう、近づくなとか、そういう命令を出したことが門田さんには辛かったんじゃないですか？

門田 でもそれは理解していました。僕が好きだと思っても相手がそう思ってくれるとは限りません。いや、僕が好きだと思えば思えばほど、相手は僕のことを好きではなくなっていくんです。うしろめしかったです。うしろめしかったです。

有島 うしろめ、というのとは？

門田 だからいつもですよ。どんな時も、オールウェイズ。

有島 オールウェイズ、んー。

問。

有島 ま、それはじゃあ、一回うしろめ………。ええとしますね、遺族の方はあなたに対してその、極刑を望んでおられるわけですけど、それについては何か感じないですか？

門田 僕と同意見だな、と。
有島 えっと、そういうことじゃなく………。んー。それにまあ、死刑ってわけにもいかなくらいです。

門田 どうしてなんでしょうか？ そりがわかりません。

有島 だって………あなたが殺したのは1人ですし、それに殺し方も特別猟奇性が高いその、特に残酷な殺し方をしたわけじゃないですから！

門田 じゃ、複数の人間を特別残酷なやり方で殺せば良かったと言っているんですか？

有島 いや、そうは言いませんけん／＼

門田 でもそう聞かれます。そうでなければ僕を死刑にできません。

有島 それはだから………行政の問題もありますよ。ここはそういう特区なんです。基本的に死刑というのはありません。

門田 死刑にしてほしいんです。

有島 それはなんでしよう、死にたい、というんですか？

門田 いや、全然違いますよ。だって、えっ……自殺と他殺は同じですか？ 全然違うじゃないですか。雨と雪べらう違います。

有島 雨と雪は結構近いような気がしますよ……。

門田 僕は自殺なんてしません。それはだっ、その、罪深い………。自分に与えられた命をまっとうしないなんて無責任です。

有島 いや、普通に考えたら人の命を奪つのも無責任で、罪深いと思うんですけど！

門田 死刑にしたい人がいるわけでしょう、僕を？ 死ぬかと思いましたよ……。

有島 ええ、そうですねですがその、まだご遺族の感情というのも事件から日が経っていないから、だからその、あなたがちゃんと反省して、心からの謝罪を行えばまた／＼

門田 許すわけ無いじゃないですか。娘さんを殺されてるんですよね？ わかっているんですか？

有島 ええ、わかってはいるつもりなんですけどね……。

門田 なんて時間が経つと忘れるなんて思うんですか？ きっとご両親は彼女のことを忘れま

せん。うしまでもうしまでも、決めて。だからご両親が僕を許すことはありません。

有島 でも……許してほしいとは思わないんですか？ どんなに長い時間がかかっても／＼

門田 だからなんで許されるんですか？ 大切な娘ですよ？ どうしてもいい人間じゃない。どう

して許しますか？ 許す必要もない。そうです。一生、許すべきじゃない。

有島 ……そうですよ、あなたは、死刑を望まわっているんですよ。現在のこの状況、これを受け入れ

たさう？

門田 それにどうですかね。

有島 違うんですか？ もうごめんなさるの言葉わ。

門田 いや、もうそれってどうですか。調書通りなんです。何をかせ。

有島 ……それじゃ話が終わっちゃうじゃないですか。

門田 だから終わっちゃってどうですか。お、お、お、あはなれなれなれって書いちゃうんです。

有島 いや、そういうわけには行きませぬのわ。

門田 取り調べでもう話しましたよ。何度か何度か。

有島 それは、そういう感じだと思つたんですけどね……。

門田 続ける必要を感じませぬ。

有島 これは裁判じゃないんです。確かにもう、裁判は終わりました。

門田 じゃなんなななですかじゃ？

有島 ……あなたに心から反省していただくための／＼

門田 教育ですか？

有島 いや、そういうった意味合も無いわけじゃないんですが／＼

門田 結構です。

有島 ……必要ないかなんです。門田さんには。

門田 心からの反省は、僕が心から反省したくなった時にあります。

有島 はい。どうですかからそのお手伝いを／＼

門田 結構です。

問。

門田 本日はお忙しいと思いますがどうもありがとうございます。お断り。

有島 いや、そんなことないですよ。

門田 かしこうござんす。

問。

有島 それじゃ、今日はこれで。

有島、席を立つ。

有島 失礼します。

有島、退場。

場面転換。

門田の場合 3 連絡

有島、携帯端末を取り出して電話をする。

有島 あ、お疲れ様です。有島です。

遠藤 おお、お疲れさん。あれもう終わったの？

有島 はい、今、終えまして。

遠藤 めっちゃ早かったね。

有島 そうなんです、途中で打ち切られちゃうような形になりました。

遠藤 あーそう。

有島 はい。

遠藤 そんなじゃさ、なんだったらこっち合流しちゃっ？

有島 はい？

遠藤 つけめの店があったじゃなご？
や、今俺ね、駅前のあそこ、並びますよ、今、あー、しなごだと言ってたあの

有島 ああ、はいはい。

遠藤 なんだったら来ちゃう？、並び直してもいいから、せーの、一回。

有島 はい、ええ、どうせあの、並び上がって来ていただく。

遠藤 おいでよ。じゃあ、おやすみ。

有島 いや、あの、事務所に戻って進めたい、じゃあ、おやすみ……。

遠藤 いや、ホントお疲れです、じゃあ、おやすみ。

有島 ああ、そうなんです、ねえ。

間。

遠藤 じゃあ俺も食ったら帰るから。

有島 あ、はい。じゃあ、おやすみ。

遠藤 そうじゃ、じゃあ、おやすみ。

有島 はい。失礼しますー。

遠藤 おつかねねー。

電話切る。

有島 食わねえっついの。

場面転換。

占部の場合 1 殺人問答

再び接見室。先程の部屋とは別の場所。

壁越しに机が二つおいてあり、一人の女(占部)と向井が向かい合っている。少し後ろに村田が座っており、その様子を眺めてる。

占部が机に置いてあるノートをひじひじと覗く。

占部 まあ、何遍も同じこと言っちゃって恐縮なんだけどもね……。

向井 ええ。

占部 なにその、殺人とか？ 人殺しとか？ 興味ないんだよね、そういうの。

向井 伺いましたね。

占部 うん。だから聞かれてもわっかんないんですよ。むしろ聞きたくないとか、どんな気持ちでえー、とか、知るわけないじゃん。

向井 そうは言っても……実際にあなたは罪を犯しているわけですから。興味があるとか無いとか以前の問題じゃない？

占部 あたしはお手伝いをしただけなんです。

向井 お手伝い、といますっつ？

占部 そんなさ、たへさん死んだって言ってもみんなゴボゴボの死に損ないでしょ？ だからお手伝いをしてあげたわけ。だいたい興味持つほどの価値無いよあたしなんか？ 頭おかしいおば

さんが起こしたありがちな事件なんだからさ。いいじゃん、それでもっ。

向井 ありがちっつにはあまりに犠牲者が多いわけなんですっつね。

占部 いーんだよねーんだよね、人数なんてどっちなでも。

向井 いや、良くはないですよ人数は。

占部 そっつ？

向井 はい。

占部 だって普通さ、百回富士山登ったぜーて人より一回でもマッター・ホルン登ったぜーって人を尊敬するもんじゃない？ 人は。

向井 いや、ちょっと意味がわからないですけど、そのたしえは。

占部 あんのよ、マッター・ホルンてのが。なんかヨーロッパの山でしょ？

向井 あなたは変われるんです。人間はいつになっても、なにかでも変わる。

占部 ……本気で言ってるのあなた？

向井 もちろんです。

占部 言ってる恥ずかしい？ 「人間はいつになっても……」あるわけねーだろそんな話。じゃなに、あたしが反省すれば死んじまった連中が生き返んの？ 「ピョーンと飛び起きて元気に幸せな人生をまた始めんの？」

向井 生きていれば、とすよ。生きていければ、人は変わるじじがわかるんだよ。

占部 頭固いねえ……。って言われんでしょあなた昔っから？

向井 なんですかそれは。

占部 クラスに一人ぐらい居たもん、あんたみたいなさういう、お勉強大好きみたいな。

向井 だったらちよっと……。話題を変えましょうか。

占部 なに競馬の話？

向井 そんなわけないでしょ(笑)……。じゃあ、もう、占部さんの好きな話でございませう。競馬はちよっとわかんないですけど……。なんなら興味あるんですか？

占部 ええー？ あなたの好きな話？ なんだろう……。ハムスターの話でもいいけど、あ、モルモットを丸呑みにするへん？の話とか？

向井 ええ？

占部 すっごいよあれ、見たことある？ じい、丸呑みにするのよ。

向井 見たことないございませう。

占部 すっごいよホント？ どのくらい？ ぐがじい、モルモットをモルミンにするんだけよ！

向井 いやいやいや、

占部 モルモットを、丸呑みにするんだけよ、

向井 はい。

占部 その餌としてモルモットの死体が売ってんだよ、パック詰めになってネットのあの通販で。それをやるわけ、じいちゃん。パカーっ。

向井 ああ、そうなんですか。

占部 興味ないね、この話？

向井 まあ、あんまり。

占部 そんなじゃあなたのお給料の話とか？ あ、ねえ、ボーナスとか出んのあたしが反省すっところ？ よくやりましたーっって。ちよっと分け前くれんだったら反省してやってもいいよ。上手

いんだからあたしすっごいっの。「ああ、かがえのない大切な命を奪って申し訳ありませんでー！ たー！ じいちゃんをもうっ償いをねせしめたいわー！」

向井 出ませんよ、ボーナスなし。

占部 ショッポイなあ。

向井 ええ。ショッポイなむ。

間。

占部 どうしてこの一歩もあたしに？ 終身刑です。はう。これ以上はしつ欲しくないから、先ほどから申し上げている通り……。

占部 心からの反省？ してないし。これ以上無いよ。もしあとほメイクになるよ。そのよか。

占部 そうなんですー。してないそれ。いい時計してないかと、どのの？ え？ 別にどのとかしてあげないよ。なにだよ。

占部 いくら？ 一、三十万？

向井 そんなにしませんよ。……せいで四、五万のじやないですか。もらい物なんで。奥さんから？

向井 あー、そのよか。

占部 ぶーん……。

向井 なんですか？

占部 その時計で何人の子供の命が救えるんだらうかね。海一回のじよつかの国はこれ。……何が言いたいのよか？

占部 たえばさ、あなたのその時計はじよつかの壽命のじよつかもじよつか誰かの命は助かるかもしないわけだよ。だらう？

向井 まあ、そのかもしれませんね……。

占部 でもあなたは時計を外さない……。どうして思ひやそれ。海一回のじよつかの子どもなんて知ったじよつかもない。だから、じよつか、そのじよつかあなたが注射して思ったじよつかも、知ったじよつかもないせいでじよつか田んぼにじよつかはめもじよつかもたかぬ？ と思ひやだよ。

向井 あのねえ占部さん、僕の時計とあなたが犯した罪と、何の関係があるってどうしてですか？ 占部 あなたの時計とあたしのやったじよつか、何が、じよつか違っていますか？

向井 全然違いますよ。それはもう最初っからじよつかくら違っていますよ。

占部 好むなら、じよつかじよつかの議論は逃げぬただだよ。あー。どうして思ひや。誰だしてその。誰だして向き合いたくないか無いよ。「自分の犯している罪なんて軽い。他の人間に比べたらはるかにまし」……そう思わなくちゃってじよつかだよ。

向井 言っじよつかはすむじよつかはね……僕はなにも法律に触れぬじよつかをこつぬわけじゃないかと、すむじよつかい。

占部 <ー、> 合法ならいーんだ？ なにをこつてせ？

向井 いや、そんな……子供じゃないとじよつかか？

占部 合法だらうがなんだからそれが罪は罪なの。ま、もしも罪なんてものがこの世にあるとじよつかはねの話だけだね。

向井 よ、じよつかはすむホンター。

占部 ほら来た。いいね。そのじよつかの悪意が大好き。結局さ、あなたもあたしもまきとじよつかに大した違いは無いよ。「他人のことなんて知ったじよつかもない」「……それだけ。その程度。

向井 僕はそんな風にまきとじよつかをさせたくないよ。

向井 いや、あとはいっごお一人で……。
占部 なにいったんの。聞こえねえんだろ？
向井 ですけどまあ、日本語がわからないってわけじゃありませんのよ。

向井、このシーンの最初に置いたノートとペンを示して、退場。

占部の場合 2 筆談のシーン

◆映像：以下の筆談の様子がホワイトボードに照射される。

村田 (筆談) はじめまして。村田玲奈と申します。

占部、筆談には答えない。

占部 やらねえよそんなじつは。やらねえ。

間。

占部 なんなんだようとうじいな。帰れって。帰れ。か・え・ね。

占部、ジェスチャーで村田に帰るように促すが、村田はうまくその意図をつかめない。

占部 もう大っ嫌いなんだあたし障害者とか。なんなんだよ。

占部、筆談をする。

占部 (筆談) 死ぬ。もしくは死ぬ。

村田 (筆談) あなたの話が出来てくれそうです。じつもありがとうございます。
占部 ……脳みそ腐ってんなこの女。

場面転換。

事務所。

遠藤と有島がいる。

遠藤 そういついじやダメなんだよ、有島さん。反省反省しておいしけちゃって。それじゃ今のまでの日本のね、法務省直轄時代となんにも変わらないじやないっ。

有島 すみませぬ。

遠藤 肝心なのは彼の自主的な反省っていつかさ、そいついアしなんだから。まずはあなたが「受容」のスタンスから入らないと。

有島 はい。

遠藤 録音聞いてたらもう、すべ反論しちゃって。ぜんぜんダメなんだよ、そいついんじや。わかるよね？

有島 ……ちよっと自分も冷静さを失ってまじっ。

遠藤 いやいやいや（笑） 冷静にやんのが仕事なんだから。でじよ？

有島 はい。

遠藤 「統制された情緒的関与」「これ基本でしょ？

有島 はい。統制された情緒的関与。

遠藤 あ、善悪の判断もしない。これも鉄則。何度も言ってるじやない？

有島 はい。おっしゃる通りです。

遠藤 ま、有島さんもそろそろ慣れてきてんだから、学習しててもらわないと。

有島 申し訳ありませんでした。

遠藤 うん。じゃあ、ちよっと肝心なところ一個教えようってあげるけど、

有島 はい。

遠藤 「待し」「待し」だけだから。

有島 待し……？

遠藤 そう。自分のこう、価値観？ みたいのをさ、言いたくなっちゃうのをグッとこらえて、そんで受刑者からの内発的な成長を待し、ていつか。自己決定力をつけてあげなくちゃいけないわけだから。わかんないじよ？

有島 はい、待し。心がけて。

遠藤 うん……だからなに……あなたも出来る人だとは思っから。しっかり忘れないうえ、ね。

有島 はい。すみませぬでした。

遠藤 いやいやいや。もう。あの、書類だけちゃんとして、まじめにしてね。

有島 あ、はい。明日中には必ず。

遠藤 いやいやいや……。今日今日。伸びていても記憶簿はちゃんだけだからさ。ね？ 気がついて、今日中だ。

有島 あれ、でも今日はこないだの立花さんの分を先にやっちゃおうかなって……。

遠藤 だからあれも今日中だよ。たまには、いいじゃない？

有島 ああ、はい。じゃあ、今日中だ。

遠藤 おう。気合な！

有島 はい。

遠藤、退場。

向井 所長には確かに営業力でものがあって、僕ら派遣のメンバーも含め、仕事が無いって状況になることはまあ、無かったわけですから。本当にそれは、ありがたいことだったわけです。

株式会社キョウセイ・リンク 2 通話

有島、電話をする。

向井 はい？

有島 ああ、向井くん？ 今、大丈夫？

向井 うん。大丈夫じゃなかったら出ないですよ。

有島 ああ、だよな。

向井 今、ちょうど面談終わってしなちゃんと休んでるところ。(村田に) 有島さん。

村田 ああ。

有島 あーそうなんだ。

向井 なにどうしたの？

有島 うん。ちょっと今日も遅くなりそうだからさ、今は先食入って、と思っ。

向井 ああ、わかった。って事務所戻ってくたさすよ？

有島 うん。

向井 どうせ会っじゃんせしたら。

有島 ああ、そうだったね。そっか。

向井 どしたの？ なんか元気ないじゃん。

有島 ええ？ そんなことないけど。

向井 ああ、そう。ならいいんだけど。

有島 え、誰と一緒にいるの？

向井 ん？ しなちゃんだよ。

有島 ふーん……。

向井 ホラ、現場一緒だったから今日。

有島 あ、そう。じゃあ、ちょっと代わってまじまじ？

向井 ん？ なんだ？
有島 えー、ちょっと確認したいことがあるっサー、仕事で。
向井 あ、そう？ ……なんで沖繩なんだ。(村田)「ちょっと代わってほしいんだけど。
村田 え、はい。(電話を受け取って)あ、もしもし、お疲れ様です村田です。
有島 ああ、しなちゃん、どうもどうも。
村田 はい。どうも。お疲れ様です。
有島 (明るく)「どうですか？ うまいくらいかな？」
村田 ああ、はい。いろいろ向井さんに助けをいただいたこと……。
有島 ああ、そう。ま、最初は大変だろうと思うけど。がんばりよ。
村田 はい。あ、ありがとうございます。
有島 うん。がんばり過ぎない程度に。ね。
村田 あ、はい。そうですね。ほむほむ……。
有島 うん。じゃあ、それだけだから。じゅめなね。
村田 ああ……え？ じゃあ、電話戻します？ 向井さん。
有島 いやいや、大丈夫。よろしく言っといてー。
村田 あ、はい。失礼しまーす。

電話切る。

株式会社キョウセイ・リンク 3 一服

向井 なんだって？
村田 え、なんかちゃんとやれている？ みたいな。そう感じました。
向井 ふーん。なんだらうね？
村田 えー、心配してくねってんじゃないですか？
向井 そっかそっか。
村田 でも忙しそうですよねえ。担任になっちゃっひ。
向井 すぐなるよ、村田さんだって。
村田 やー、あたしはまだ。へーへーですっかじ。
向井 俺だって別に経験豊富ってわけじゃないよ。
村田 えー、だって向井さん「リンク」の事業所の中では一番長いんですよ？
向井 ま、そうだけじ。
村田 ベテラン、ベテラン。
向井 いや、もっとちゃんと勉強した人じゃないとき、ホントは派遣がやっける時点がおかしいんだから。
村田 いや、正社員もそんなちゃんと勉強してのわけじゃないですよ。
向井 有島さんみたく優秀な人材ってんなら話は別だらうけど、
村田 ですよねえ。ホントだったらこんなところにいるような人じゃないですもんね。有島さんは。

向井 元・官僚ですからね(笑)

村田 やあ、そんな人と一緒にやってるだけで、お腹いっぱいです。

向井 なに言ってるの、あなた正社員でしょ。

村田 や、そうですよ。

向井 有島さんだって派遣なんだから、肩書的には。

村田 あたしは別にたまたま正社員になったっただけですから。

向井 たまたまなれないでしょそんな。

村田 でもあれじゃないですか？ 向井さんも二人でこんな仕事よくやっていますよねー。

向井 あー……でも、むしろ同じ職場じゃなかったら無理じゃない？ この仕事は。

村田 ええ？ なんですか？

向井 時間もメチャクチャだし、精神的にもね。ある程度わかっている人じゃないとやっぱり。

村田 えー、そんなこと言わないでくださいよ。あたしぜんぜん出会い求めているんですから。めっちゃ募集中ですよ、う。

向井 元気だねえ。

村田 当たり前じゃないですか。女はやっぱ若いうちが勝負ですから。

向井 うーん、俺はもう、そういつ元気は無くなって来ちゃったからな。

村田 ええ？ 聞いてますよ、そんなこといっしょ。コソコソー。

向井 ……なにになっ？

村田 おめでたなんじゃないですか？ 有島さん。

向井 ええ？ そんなこと無いよ。なにこいつなの。

村田 んーまあ、まだ秘密なんだったら別に詳しくは聞かなくていいよそんなの。なにそいつの話になっつんの？

村田 女のカンです。

向井 はあ？

村田 ま、ま、こいつはこいつです。言うたくなさるもねえ。ハイ。

向井 いや、無いよ、ホントに。

村田 ええ、ええ。わかりました。そういっしょ。あー、でも、どうなってますか、今の担任の入っし。

向井 え、ああ、口部？

村田 はい。いや、なんか進み方ってどうか。

向井 苦戦なんじゃないの。全く又管の色なっ。

村田 どうすよわー。

向井 筆談作戦でちょっとは進めばいいんだけど。

村田 いやー、ぶっちゃけ自信無いんですけどねあそこよ。

向井 そっし？

村田 そもそも聞いてますっし、っしっし。

向井 あーそれはだから、完全に聞いてないわけじゃないっし設備にしてっしっしよ。なんかうっから又感してっしっしっしをさっしっしっしは聞いてるんだ、みたしなっしっしっしっし。

村田 無理ありませんか、それ？
向井 ま、最悪バシたらバシたでなんとかするよ。どーせ出てくるわけじゃないんだから！
村田 はい……。ですよねー！
向井 そっそっ！

と、村田の携帯が鳴る。

向井 あ、やべ。遠藤？

村田 はい。あ、でもメールなんで……。

向井 なんだっ？

村田 いや、なんか、「メガネが曇って前が見えない」

向井 うぜー。

村田 なにやっつてんだですかね。写真しかありません。

向井 拭けよな。そんなことやってる暇だ。

村田 またラーメンでも行ってんですかね？

向井 じゃねえの。

村田 ホント好きですよねえ。あの人。

向井 や、でもね、見る目は確かなんだよ。さすがだ。

村田 あ、そっなんだですか？ よへ行ってますよね、一緒に。

向井 うん。職場離れちゃえば結構いい人なんだよ、あれで。え、でもなに、しなちゃんにもそ

んな友達みたいなメール来るんだ？

村田 しっしっいってすよなんかあの人。

向井 うわー。がたがたっ。

村田 さい、がたがたさせると。

向井 「今終わったしっしっいって帰ります」って返信してごらな。

村田 あ、はい。了解です。

ふたりの、退場。

向井 この頃は僕もひえひえんもどにかへ疲れてました。毎日べったりしているようなそんな時期で……。とほろえ、それでも次の日は容赦なくやっつけてしまっわけだよ、僕もひえひえんもまた、翌日は朝から仕事なのでした……。

場面転換。

長い間。

佐野 無いんですか、なににか？

門田 え？ はい？

佐野 あなたの方からはなにか？

門田 僕の方から……。

間。

門田 特には。

間。

門田 あ、ええと何でも。あの、言っていたら結構ですと……さるさる、言っていたのを言っていたんだけどさるか、あの、あると思ってますのよ。

佐野 ……私？

門田 はい。もうなにも、言っちゃっていいわさ。

佐野 ……なにを？

門田 ええと、たぶんえはですか？ たぶんはだから、うーん……あの、だから、許さな、とか、忘れるな、みたいな。は、反省、反省、してるのか、みたいな、とか。

佐野 それを言ってる？

門田 いや、えーと、うーん、わかんなさるんですけど、だから、そっじゃないのかもしれないですけど……えーと、そっじゃない、わかん……。

佐野 私からはありません。

門田 ……はい。

佐野 あなたからは？

門田 あの……。

佐野 ええ。

門田 ちよっとわからなさる。あの、……ちよっと、わからな……。

佐野 ……そう。

門田 はい。

間。

佐野 それじゃ、あたしからってわけでもないと……あなたに会いたがっている人から伝言を預かってますと……。

門田 はい。

佐野、持参した封筒から中に入っている手紙を取り出す。

佐野　ウチの家族だってもちろん言いたいことはあるんですけど、でも、今、ウチの中はメチャクチャです。あなたのせいでは。お母さんは一日中横になっていて、お父さんはお母さんが自殺しないようにずっと見張っています。誰も笑いません。あれから毎日、ずっとずっと、生きていくだけで必死です。

門田　……はい。

佐野　一応、私は被害者の親族ということでああなたに会う権利があるわけなんですけど、あなたと会いたくても会えない人も沢山います。あなたと違って、あの子にはたくさん友達がいたわけですから。

門田　はい。

佐野　今日はそういう人から預かっている言葉を読みます。いいですか？

門田　あ、はい。お願いします。

佐野　(手紙を読む)「とにかく早く死んでくれ。人を殺したんだからお前にも生きる権利なんか無い。むしろまだお前が生きている理由がわからない。意味がわからない。ワケワカメ。どうか一日も早く死なせてくれ」……以上です。

問。

佐野　何か言うことはないんですか？

問。

佐野　優子を本当に好きだった人たちに対して、あの子があの子であるために必要だった人たちに対して、何の興味も無いんですか？

問。

佐野　じゃあ、帰ります。

佐野が席を立つ。

有島　(門田に)「じゃあ……」。

門田　はい。あ、あの、ありがとっついでに……

有島　立たなへっついでに……あなたほ。

問。

佐野、有島、退場、

門田の場合 5 親族、面談

有島 今日はお忙しいところにもかかわらずお越していただきありがとうございます……。

佐野 ええ、ええ。

有島 門田なりにその、反省の気持ちでいらっしゃるのが少しはいいと思いますけど、現
「その、」遺族の方との面会以外にはその、誰とも会わないです。でもあの、なかなかそれが
まだ言葉にはならないと申しますか……。

佐野 出てくるんですよ、あの入？

有島 はい。そう、ですね。時が来れば。

佐野 無理じゃないんですか？ あれじゃ。

有島 あーはい。

佐野 何もわかってないと思いますよ。

有島 はい。でもその、我々としたしましてもその、全力で、そういう彼がその、少しでも理解
できるように、支援を続けていきたいと思っております。

佐野 いいですね、人を殺して支援までされて。

有島 ……はい。

佐野 欠けちゃってるんじゃないんですか？ なにか人として必要なものが無いと思えますよ、
あの入。

有島 はい。できるだけのことはさせようと思っただけなんですけど……。

佐野 私が殺したらダメなんですよ。やっぱり。

有島 彼をですか？

佐野 ええ。

有島 それはあの、ダメです……。

佐野 所長さん、どちらでしたっけ？

有島 あ、そちら突きま当りのすべ右に……あ、一案件をせよっただけです。

佐野 結構です。

有島 あ……。

佐野 バスって何分でしたっけ？

有島 ええと、あ、なんでしたらあの、タクシー呼びたいんですが……。

佐野 じゃあお願いします。

有島 はい。お呼びしておきます。

佐野、退場。

有島、門田の居る部屋に戻る。

門田 でも……彼女は誰にも似ていません。彼女は、彼女だけの個性を持っています。僕はそれを愛した。だから彼女の代わりなんていないんです。見つかりません。彼女は誰かと交換するところが不可能です。僕にとって、彼女はそれべらいスへシャルな存在だったんです。

有島 それはご家族にとってもそうでしょうか？

間。

有島 彼女には彼女の人生があった、そうは思いませんか？

門田 思います。

有島 だったら、彼女の好きなようにさせてあげなへちゃ。彼女はだって………なんですか？ 試験にも合格して、保育士としての就職先も決まっていた。卒業すればいいよいの、「なかよし保育園」での勤務が始まると、そういう時だったわけですよ。

門田 彼女の理想の人生に僕が登場しなかったらどうするんですか？

有島 「理想の人生」？

門田 そうです。彼女のやりたいようにやる人生……。でも、そこに僕はいない。どうするんですか？

有島 だからその……諦めなければいけない部分もあったんじゃないですか。

門田 諦めました。

有島 諦めて無いじゃないですか？ あなたはだんだんと彼女の生活空間をおびやかしていつて、次々にピルクルを送りつけた／＼

門田 誤解です、そんなことは、いや、ピルクルは確かに送りましたけど、

有島 それですよ。

門田 でも、こんなのは全然僕の理想とはかけ離れています。僕だって彼女とずっと一緒にいたかった。それだけが願いでした。でもそれは受け入れられないと理解した。だから諦めた。

有島 違うじゃないですか、だってあなたは／＼

門田 諦めたから殺したんです。諦めなければ殺しません。

有島 全然繋がらないですよ……。だって、諦めたのであれば彼女から身を引くのがその、なんでもしようか、思いやりとどうか、そういうものなんじゃないですか？

門田 僕から開放してやるべきだったじつ？

有島 そう……まあ、そうですね。そういう………なんていうか、辛い判断が必要になる時もあります。

門田 わかっていますよ。

有島 そうですか？

門田 ああ……有島さんは僕がそんなこともわからない人間だと思っているんですね。今までのなんの苦勞もせずにいいままに生きてきたと？ 人生で妥協した経験が一切ないと思っっているんじゃない？

有島 いや、それももちろんあなたにもいろいろな事があったでしょう／＼

門田 僕の彼女への思いはじつなものでしょうか？

有島 それは……なんとかがすぬとしますよ。

門田 なんとか？

有島 だんだんどうも、忘れてしまふみたい。

門田 僕は忘れたくありません。

有島 その気持はわかりますよ。わかりますけども、

門田 人は人に忘れられた時に本当に死ぬんですよね？ だから僕は忘れたくなんかない。いつか生き返ることを。僕の中には。今も。これからずっと。

有島 だからってその……いや、ちょっとそれは話がズレていますよ、それはだって、うーん……別に忘れるとは言いませんけど、でもそうじゃなくて、その時、あなたの愛がうまく受け入れてもらえなかった段階で、あなたは彼女から距離をとる必要があったんじゃないでしょうか。

門田 どういうのですか？

有島 いや、だって、優子さんがそれを望んでいないだとすればですね、

門田 名前を呼びなつてさっさと別れよう……

有島 すみませんそれは、

門田 あの人と離れてしまったら意味が無いです僕は。「ハイ次、ハイ次」としろと言うんでしょうやっぱり？ 僕はそんな人間になってまで生きていたくはありません。あの人のいない人なんて想像できません。

有島 これがそのつもり。

門田 ……はっ。

有島 今、門田さんは彼女のいない人生を生きよう。そうじゃないのですか？

門田 違います。

有島 違いますか。だってそうじゃありませんか、

門田 僕は彼女のことを忘れません。だから、生きようんですよ彼女は。僕とともに、これからも生き続けます。……たとえ遺族の方が彼女のことを忘れると言ったとしても、僕が覚えていることすら汚らわしいと感じていたら、それでも僕は彼女を覚えていきます。有島さんは愛を拒絶されたことが無いのですか？ 有島さんが愛した人は必ず有島さんを愛してくれたいんですか？

有島 いや、そんなことはないですよ。私だけのやりかた。

門田 それで、「ハイ次、ハイ次」とやって生きてきたんですわ？。きれーにその人のことを忘れて。あなたにとって大事だったのはその人じゃないんです。そうですよ。有島さんは自分を愛してくれる人だったら誰でもいいんですよ。相手のことなんかどうだっていいんだ！ だから有島さんはすべて「ハイ次、ハイ次」って言うって乗り換えていけるんですよ。僕は、そういう人間じゃない。

問。

有島 彼女のビュウが好きだったんですけど、その、あなたが感じていた魅力というか……。

門田 ビュウビュウ。

有島 すべて。

門田 はい……素敵な人でした、本当に。……優しくて。明るくて。くだらないことでもすぐに笑ってくれるんです。ビーバー、ビーバーの顔真似が得意でした。というか、げっ歯類全般、大体レパートリーだったんですけど、

有島 げっ歯類？

門田 ハムスター、ウサギ、リス、ネズミ、ヤマアラシ、とか、まあ、全部一緒なんですけどね。でも、ちょっとだけ違うんですよ。

有島 そうですか（笑）

門田 いつも周りのことを考えていて、だげどキレイ事ばかりじゃない、ちゃんとわがままも言っていて、すべて涙を流して、他人のことでも自分のことでも、失敗したら悔しいと言っていて、成功したらうれしいと言っていて、笑顔も、泣き顔も、人を憎んで罵っている時でさえ彼女は魅力的でした。

有島 ……いい思い出があるんですね。

門田 たくさんあります。僕の人生で起きた素晴らしいことのトップ・テンは全部彼女に関係することです。初めて会った時も、初めて一人で中華料理を食べに行った時も、本当に嘘みたい………いい……時間でした。僕が彼女のチックを褒めて、なんだかすごく照れてくれて、うれしそうにしていて、一度なんてあの、彼女が学校で嫌なことがあったんですけど、その、人間関係でちょっとづつづつあった時なんですけど、すごく悩んでいて、

有島 ええ、ええ。

門田 その時なんて僕と会って、その、なんですか、「会った瞬間に感動してなんか、泣いてしまった時があった。なんですか、その、安心して、っていうかそういう、もう………だって泣かないじゃないですか？ 泣きませぬよそんなー！ それで僕は、だからもう………なんだか、わからないうちですけれど、なんでしゅうその………だから、有島さんも彼女に会ったらきつとわかりますよ。そういうあの、好きになりますよ。

有島 ええ。お会いしてみたかったです。

門田 はい。でも、それはできませんね、せう。

間。

門田 じつじつと生まれてきたんですけど、僕は？

間。

門田 僕が生まれてこなければあなたは、有島さんは彼女に会うことができた。生まれてこない方が良かった人間もいるんですけどしゅうか？ でも意地悪ですよねー、世界って！ 僕みたいな人間が彼女と出会った瞬間に生きていく。出会わない瞬間に死んでくれたってよかったのに。あんな素敵な人のことをしゅうちゅう泣かれるんですけど？ 泣きたかっけりませぬ。彼女のしゅうを泣かれるくらいなら死んだほうがスミイ。しゅう。

間。

門田 彼女は僕なんかいなくても素敵な人です。でも僕は彼女がいなければ生きていけない。忘れることなんてできない。だから、僕みたいな人間は最初から生まれてこなければ良かったんです。僕は誰も恨んでいません。彼女以外の人のことも誰も。だって素敵な人は世の中にいっぱいいるんです。それもわかっています。でも僕は全然素敵じゃない。彼女も言っていましたよ。僕は魅力が無いって。僕が生まれて来ないほうが世界はうまくいってたんです。だったら産まないでくださいよー！ 僕が恨んでいることがあるとすればそれはそれです。このすばらしい世界に、どっぴりしてこのすばらしい僕を産んだんですか？

有島 ……生まれてきた方が良かったんです。あなたは。

門田 でも僕を死刑にしたいと思っている人がいる。

有島 それでもです。

門田 そんなわけないじゃないですか。へー？ どっぴりしてですか？

有島 いや、そんなハッキリどうとかっていう風には言えないですけど……でも、生まれて来たほうが良かったんです。生まれて来ない方がよかった人なんていません。

門田 彼女を殺したのにですか？

有島 そうならない人生もきつとありえた。

門田 そんなことはあります。

有島 いや、きつとあったんです。

門田 ありません！ 僕はもう一度生まれたらもう一度彼女と会いたい。だけどその時に僕を愛して欲しくなんかありません。だって僕は素敵じゃないから！ 魅力が無いから！ そんな人間が彼女に愛されないのは当然です。愛してもらいたいなんて思わない。だけど僕は好きなんです。何度生まれかわっても僕はきつと彼女を見つけて、出会って、そして殺します。

と、こいで少し離れた場所にいた向井が鼻歌を歌いながら掃除を始める。

向井 ラララン・ラララン、ラララン、ルラルラルラララン……。

間。

門田 だから、僕のお墓は作っていただかないで結構です。僕はどこにも宿りません。天国からこの世界のことを見守ったりなんかしません。いや、もちろん僕は地獄行きでしょうけど、地獄からでも、この世界のことなんて考えません。だからもう二度と生まれかわらないべららい徹底的に僕を殺してほしいんです。世界から僕だけを消すための「ナ」にすり潰して海に、いや、宇宙のその、さらに外側でも捨ててください。

有島 宇宙の外は、難しいかもしれないですけど……。

門田 大丈夫です、宇宙なんて僕よりも小さい。たった、僕の頭の中だけのこじです。

有島 どうですか……？

門田 ええ。全部、僕の頭の中のことですよ。夢を見ているようなものです。全部。人生は。

有島 これは現実です。夢じゃありません。

門田 わかっていますよ！ わかっています。

有島 世界は、あなたの外にあるんです。

門田 ありません！ あったとしても知りません！ 僕は知ることができない。僕が知っていることも、僕が想像することも全部、僕の頭の中の出来事です。

有島 今日はもうおしまってください。

※向井の掃除、鼻歌が終わる。

門田 はい。そうですね。僕もちょっと疲れました。有島さんも……。

有島 はい……。ああ、もう……。

間。

有島 全然ダメですね、私。あの……もうちょっととぎえい。はい。もうちょっととぎえい出て来ます。

有島、荷物をまとめて帰る準備をします。

門田 もう結構ですよ。

有島 はい？

門田 ありがとうございます。

有島 いやいや、また来ますよ、ちゃんど。

門田 言いたいことはもう全部残らなくなりました。

有島 そんなこと言わずにまた……。

門田 いえ、僕はもう、永遠にしゃべりません。

間。

有島 それじゃ、ハイしも行けないじゃないですか。……願います！ 用便、願います！ っつて言わないとほら。おっしよもほらちやこまますよ。

有島だけ少し笑う。

間。

有島 また、来ます。

有島、退場。

向井 実際、それから門田は何も話をしなへなつてしまつたところだ。ほや、何れも黙つていれなかつちやつたところ、りえ、びんはさう言つてました。「それとさうか」とか、「その通りです」とか、それなういふ言ひなへなつてしまつたところだ。

場面転換。

有島・向井の家。

向井 ちよつと痩せちゃったかね？

有島 ん？ ああ、そう？ わかんない最近測ってないから。

向井 大変そうじゃんなんか、今の人。

有島 まあ、こういうケースの担任になんの初めてだから。つてのもあるだろうけども。
向井 ほどほどにしかないと。

有島 うん……。そっちもなんか大変なんですよ？ 終身刑だって聞いたけど。

向井 いや、楽勝だよせんぜん。

有島 へー、そう？

向井 だって出てこないんだもん、結局。

有島 ああ。

向井 まあ、罪としてはこっちのが断然重いだろうけどさ、一生刑務所中なんだから。そつ
ちよつと重みが違うよ。

有島 でもなんか頭おかしい人なんですよ？

向井 うーん。結構、まともな気もすんだけどね、話してるよ。

有島 へー。

向井 刑事責任はバリバリにあるからわけだから。

有島 人格障害？

向井 だったかな？ まあ、アテにしないけどね、精神分析とか。

有島 まともなのにそういうアシになっちゃうもんなんだ……。

向井 そりゃまあ、何十人かやっちゃってるわけだから普通じゃないんだろうけどさ。

有島 ヒエーだね。なんかお医者さんみたいなやつだったんですよ？

向井 お、詳しいじゃん、誰に聞いたの？

有島 えー、なんか睡眠薬とか打って殺しちゃったつて。

向井 そうそう、筋弛緩剤。そういつのどんどん打っちゃって、つていつ。

有島 うわあ。

向井 そんなで相手がターミナルの老人だったから長いことバシなくて。安楽死殺人っていうの？

有島 捕まえてみたらもう十何年かそういつのことやってたつていつ……。……。

有島 なにきえてんだらいつねえ。

向井 それ言っちゃおしまいでしょ。わけわかんない人ばっかなんだから。

有島 だけびえ……。やつは医者とかやつてるけど勘違いしちゃうもんなのかな。そういつ、自分
「は命をコントロールする力があつていつかな。

向井 どうしたいの、君は？

間。

有島 言いつておひでするよ。ホントにこれは私が悪かったから……。

向井 あ、そっし？

有島 うん。

向井 え、本気で言ってるの？

有島 ……どうして？

向井 いや、なんか普通の「言いつた」な感じっすか。そんなにどうしてじゃ。

有島 「じゃ。」

向井 いや、「じゃ」とかじゃなくて。なんか意外っすんか……。あ、別にそんな怒ってるとかではないんだけどね、ま、一応は専ら特区なわけだし？ 俺もそっすうのはわかってて「一住んでみるわけだから」。

有島 うん。

向井 て、あれ？ どうしたいの？

有島 ……あなたは？

向井 俺はまあ、そっし問題がそもそも起きひらなごで平和じゃってんやとてなめ、と謝ってたわけだからね。よくわかんないんだけど。

有島 ……うん。

向井 つてあれ？ 謝るの？

有島 え？ うん。

向井 謝っしてどうしたいの？

有島 え、どっし言わねしめ……。

向井 ん、ん？ 別に「どうしたいの？」「っそんな変な質問じゃないと思っはよ。」

有島 いや、あなたはどうしたいの？ っていう方が先なのかなって思っ。

向井 なに悪いと思ってるの？ ってことだし、そんなこと言わなかつ。

有島 うん、んめ……。

向井 ちよっと君の中で何がどういっつになつてるとのかよくわかんないんだけど。

有島 ……結果としていっつなつてしまったのはだから、申し訳ないと思っます。

向井 なにどういっつなつて？ バッしたじゃが？

有島 いや、それもあつて、それだけじゃなくて、

向井 え、じゃあなに、「バ」しなわけは何かいっつな？

有島 や、そっしじゃなへ、ただかひらなつて、うん、なただよ。家族のいる人とっつなつたやつてたつてもよくなかつたよは思っ……。

向井 うん。

有島 だから別に、向井さんのほつて無理だとなったらあたしたちの関係も続けられないの
かなって思うし。

向井 まあ、別にいいじゃない。それは。

間。

向井 そりゃあへはならんだらいいけど。じゃ、別にいいじゃないかあったから止めよう
かそつて風にはきかしてなごう。

有島 ……そう。

向井 え、だから、おいおいって(笑) あなたからなにか言いたいならさ。

有島 あ、ああ……。あたしはだから、一緒にさつてほごう。

向井 あ、そう。

有島 はい。

向井 でもなんかあれだね。いかなんか言わなきゃいけない時間さちやういふいふまへへなつち
をいひごう。

有島 いや、そんなことはない。

向井 じゃあ、いかにじゃなごう。なんごう。

間。

有島 まだ、もうひと言っておかなくちゃいけなごうが。

向井 なごう？ ……あ、子供か。

有島 え……？

向井 ……そうか、子供か。

有島 いや、

向井 アしんどい？

有島 いや、違わなごう。

向井 なるほどねえ……。

間。

有島 どつていふかなあつて思つて。

向井 なごう？ どつていふか。

有島 だから産んでいいのかなあ……。

向井 ん？ なに俺が許可を出すわけ？

有島 え、何が？

向井 いやだから、

有島 ああ、産むなごう？

向井 いや、言っていないでしょ。別に勝手にすねばって感じだけだね。

有島、絶句する。向井、笑う。それを見て、有島も少し笑う。

向井 いや、さすがに冷たいかもしれないけどそれは。

有島 いやいや……。

向井 君はぶっしたいとかあんの？

有島 ああ……ま、あなた次第っていうか。向井クンのアシかかって思っているけど。意識って
どうか。

向井 え、ぶっっちゃけさあ、ぶっちの、とか、ぶっなのその入んは？ なんか君的には予想って
どうか、無いの？

有島 んー。ハーフハーフかな。

向井、笑う。

向井 あ、そっ。

有島 うん。

向井 避妊してるよ、どっちかどは。

有島 ですよ。

向井 ですよじゃねえよ。アホか。

よ、そいへ村田、登壇。

村田 あ、おはようございます。

向井 おはよう。

有島 おはよう。

村田 もういらしてたんですけどね？ あー、なんかあの、郵便物届くところまで押さけて、押しちゃっ
たらどうですかハンコ？

有島 ああ、誰かじゃ？

村田 あーいめんなさい、ちょっとわかんなくてすいません、

向井 まあどうも。取り戻してよ。

村田 あ、はい。じゃあ。

村田、退壇。

有島 早いねしなちゃん。

向井 ……。

間。

村田、戻ってくる。

村田　なんか佐野さんって人からでしたけど、荷物。わかります？

有島　あ、それあたしだ、多分。今の担任の子が、相手方、佐野さんだから。

村田　こっち持ってきます？ すっごく重い重たかったんで置いていたんですけど……。

有島　いーよいーよ。あつて見ゆいから。

村田　すみません……。あたしもいいですか、ちょっぴり？

向井　どうぞ。

村田、二人のそばに腰掛ける。

村田　だあ……。早いっすね、お二人とも。

有島　しナちゃんも早いじゃん。どうしたの？

村田　いや、あたしいつもこんなもんですよ。なんか朝バタバタすんの嫌なんで。

有島　ああ、そう。

向井　とういか、せっかくだからしナちゃんにも聞いて欲しいことがあんだよね、

村田　はい。

向井　あ、当たってたわ、こないだしナちゃんが言ってたやつ。あの、なんかおめでたとか言うてたじゃん。

村田　あ、やっつひびきさうすすよねー！　えー、おめでついでいれさすー！

間。

村田　つて、あー……ん？　なんか……。

向井　(村田に) え、それって誰から聞いたの？

村田　えーとまあ、噂で？　なんとなく。

有島　いや……こないだちよつとそんな話になつた。

向井　ああ、そう？　(村田に) え、そうなの？

村田　はい……なんかあの、軽く、お話を伺って。つていっても全然、ホント軽んですけど。

向井　(むいっしん?)

村田　(むいっしん?)

向井　いや、産むべきかどうかって話なんだけだね。悩んじゃってちよつとき、二人で、な。

間。

村田　んー、(むいっしん?)　ちよつと(むいっしん?)　めつない(むいっしん?)　え、なんか問題あるんですか？

向井　(むいっしん?)

有島 いや……「じいちゃんの話？」

村田 あ、ですよね。なんも問題なかったら「じいちゃん」って感じじゃないですよね。

向井 いやね、誰の子だかわかんないって「じいちゃん」だよ。

村田 あ、へえ……！

有島 だからハーフハーフっていつてんじゃない。誰かわかんないってことはないよ。

向井 そうそう。ハーフハーフなんだって。だから俺と……その人と。ハーフハーフだって「じいちゃん」の人。

村田 これ間違いないけどあたしが口を出しちゃいけない案件ですよね？

向井 そうっ？

村田 はい。っていうか、むしろなんでその話をされちゃってるのかな、今……。

有島 ほんとだよ。「ごめんね、なんか。」

村田 「ええいえいえ。」

向井 いや、それはわかってただけだね。ま、あえて。ちょっと聞いちゃえと聞いて。勢いで。

村田 勢いで……。

向井 いや、正直ちょっとこれ冷静なのか俺？ みたいなことはあんだけどさ。

村田 ええ、ええ。

向井 え、え、どう思うっ？ いや、あくまでも参事意見としてだから。ね。どうっ？

村田 ……なにを言っても損をするような気が……。

有島 だよねえ。

向井 いや、そんなこと無いよ。困っちゃってるって話なんだから、単に。

村田 え、それはあれですか、なんか、別れちゃおっかなー的な話に発展するかもってことですよ

よね、お二人が？

向井 ま、ま、そういう可能性はあるんじゃないよ。

村田 じゃあ、アしじゃないですか、あの「もうすっごい無責任に言いますけど、DNA鑑定とかしちゃえばいいんじゃないですか？」って、「っ、っ、っ、踏み込んだあたし。」ってあれ？ 出来ないって言ったっけ？

向井 いや、出来ると思うけどね。だから、してもいいんだけどねもちろん。あ、なるほどよね。

村田 はい。

向井 なんせ話が急だったからさあ……。いやね、ちょっと「この人がなんか、もう一人つきあってる人がいるんですけどオ、みたいな話があったって、それとセットでっっていつか。

村田 ああ、ああ、ああ。

向井 どうしすの？ どうしすの？ みたいななってっついで子供の話が出てきたからさ。

有島 あとで言ったらもう悪くっついでっよ。

向井 だったら昨日言えはよかったんじゃないっ？

有島 言えなかつたじゃん、昨日は。

村田 っつっていつかダメですよね、あたし、「この話聞いてちゃっ？

有島 いや、「ごめんごめん」なんか。

向井 うーん。動揺してるとだよね。ま。

村田 ですよ、なんか、そんな感じなんですしょうけど……。

向井 むしろこうなっちゃったらこの会社続けていけないのかって話も出てくるしなあ。

村田 あー、え、そういう話になっちゃうんですか？

有島 いや、辞めるならあたしが辞めるから別に。

向井 え、なにその言い方、ちょっとおかしいですよ。

有島 は、何が？

村田 あ、あ、あ、あの一、ちょっとあたし電話が、かかってきたことにします。なんか、あ、電話だー。

村田、退場。

有島 なんなのやめてよ。

向井 辞めるならあたしがとかって言ってたけどさ、それ、俺の決めることなんじゃないの？

有島 そうかもしないけどさ。

向井 ていつか、する？ 鑑定。そっちのが問題ですよ。

有島 うーん。

向井 あ、でもあれか。いずれにせよ一択だもんね答えは……。ん、違うか。

と、向井席を立ててホワイトボード以下の説明に使用する図を描く。

向井 俺の子かそうじゃないかっていう一択があつて。で、そこから、産むか産まないかの二択があるのか。

有島 四択だね。

向井 四択だね。

有島 ま、だから鑑定までしたら一応、一択までは絞れるんじゃない。

向井 え、でもその結局、選択肢は限られるわけだし、その、それぞれの場合どうするのかわかっているのは先に考えたいほうがいいんじゃない？

有島 そっ？

向井 だってほら、しずかを任せろっていつかになるんだしたら、しなへていつかわけだし、鑑定なんか？ 断固拒否、ってことだったらね。

有島 ああ……。

向井、ホワイトボードを離れて元居た場所に戻り、

向井 いや、もちろんそれはあなたが決めることなんだけどもね。

有島 いや、あたし一人で決められることじゃないじゃん。

向井 え、じゃあなに俺が随分させて言ったら随分すわけ？

有島 とは言っていないけどさ。

向井 そうじゃんやっぴい。

有島 ってなに、やっぱ随分した方がいいってこと？

向井 んー、なんだろう。その聞き方がもうさ、なんかズルい気がすんだよね俺は。

有島 は？ なにがズルいの？

向井 ええ、なんか……。ま、その質問も白々しい気もすんだけど……。

有島 なに？

向井 だってあれでしょ、俺の子じゃないんだったら関係ないわけでしょ？ 俺次第っていうの

はおかしくね？ ていうかあれか、あーなに？ 「どっちにする俺は育てるぜ」「みたいな、」た

とえ俺の子じゃなくても「みたいな、そっいつスタンスだったらあらかじめ言っってといてくれっ

ていっなの？

有島 今は止めようよ。職場じゃな。

向井 は？ お前が言い出したんだろ。

間。

村田 えーとあの、なんか今朝、来ないみたいですよ、遠藤さん。(ホワイトボードに「あいつい
なんですか、こね？

向井 ん？ 図。……あ、へー。なんか言ったの？

村田 え？ 別に何も言っていないんですけど、なんか電話してみたら、ちよびんいっや、みたい
な感じで。俺、今日、行かねえからって。風邪……ですかね。

向井 さすがに気まずかったんじゃないの。

村田 気まずいって何がですか？

間。

村田、有島を見る。田が合っ、い、有島、田を遠ざける。

村田 コーヒーでも飲みます？ おぶたひいませ？

有島 あ、お願いしてもいい？

村田 はい。あ、じゃあ向井さんも？

向井 いや、俺は先、行くわ。

村田 あ、そうですか？ ていうか早くないですかだしっ？

向井 だって朝礼無いんですよ？ だったらどっつか店行くわ。

村田 あ、あたし、出ましようか？ そしたら。ね、その方が……。

向井 いい、いい、いい。しゅめえね、なんか。グイ使わせちゃっし。

村田 うええ……。

向井 そんなじゃあ。

向井、退場。

村田 ミルクとお砂糖どろろしますか？

有島 やっほいさやコープー。

村田 はい。

村田、コープーを淹れる。

株式会社キョウセイ・リンク 6 村田と有島

有島、ホワイトボードの図を消しながら、

有島 いや、ごめんねホント。朝から嫌な気分になせちやっし。

村田 ーですーです。なんかちょっとびっくりましたけど。

有島 シナちゃんだってなんかこれからね、気まずくなっちゃうじゃね。

村田 いや、大丈夫ですよ、それはホント。

有島 場所柄わきまえてほしいよね。

村田 あーでもどろせもどろじき辞めますと。

有島 え？ 誰が？

村田 いや、あたしがですけど。

有島 え、え？ なんで？ なんかあったの？

村田 いや、別になんもないですけど……なんか向いてないのかなって。

有島 でも、え？ せっかく正社員なのになんか？

村田 なんかどろろともないんですけど……すっごく顔してますね。や、なんかこの仕事って結構自分の考えっていつか、そういつのが必死になっちゃうんですか？ 何が正しいとか、そういつの自分で持っていないとどきないついつか。

有島 そだねえ。

村田 あたしそいつの無いと。

有島 無い？

村田 つてもちろん個人的にはありますけど、だってわかんないですもん、ヒトの心なんか。別にわからなくもないし。っついつ、はい。だから。

有島 え、いいんだよそんな個人的に持っていれば。と、思うけどねあたしは。

村田 そうなんですけどね……んー、なんだろう、あたし少年院入ってたんですよ、昔。

有島 え？ ……え？

村田 でも、あれですよ……顔、顔。確かに前科・前歴のある人間はこの仕事にはつけないらしいよ。

有島 待って待って待って、ホントに？

村田 はい。……そんなであそこあがった後です。いい勉強して、一応大学はそれなりのところに行けましたし。あとはだから、苗字変えて引越してーってしちやえば……そうなんです。残らないんですよ。

有島 あー、へー。

村田 ホラ、「キョウセイ」って本社はぜんぜんこういうんじゃないじゃないですか？ 刑務所行ってー、とか？

有島 まあ、福祉とかそっち系だもたね。

村田 そうなんですよー！ 共に生きるですからね。だからこんな仕事になるとはまさか思ってなかったし、自分のそんな、正義感ていうか、自信無いですよよっぴ。

有島 ふーん……。

村田 あ、でも悪いことしていてもあれですよ、殺人とかじゃないですよ。せいぜい万引きとか、ちょっとあと、悪い人に頼まれて、そういう仕事のお手伝いっていうか。

有島 まあまあ、そういうね、周りがあれだし、若い時は。

村田 そうなんですよねえ……。

有島 えーでも、シナちゃんか？ って感じだねえ。

村田 意外ですか？

有島 うん。なんか、びっけりだよ。

村田 いやー、ちっちゃいころとかもう、ずーっと集中力なくてあたし。ノンノンフしちゃって。だから学校でもぜんぜん先生の話を聞いてらんなくて、めっちゃキョウマってたことばばばで、気がついたらなんか、悪い感じの友達とかと付き合っちゃうの……。

有島 でもぜんぜんそんなことないじゃない？ 集中力ないって、

村田 それは鍛えられたんですよ。だって聞いてんだぞいよー！ 私語禁止とかって言ってホント作業中へいらしいししゃべれないんですよー。もう、しゃべったら即効個室ですからね。安座ですよ、安座。

有島 アンゼ……

村田 ずーっと座ってると。じつやっぴ。カウロ。

有島 っー……ころころあったんだあ。

村田 そうですよ。あ、ホラ、なんか今あたしもころころ聞いちゃったから。おめいじです。

有島 いやいや別に、そんなビッグなお返しはなくて良かったんだけど、あ、あ、そう……。

村田 はい。

問。

有島 でも勿体ないね。辞めちゃうんだ……。

村田 だってこの仕事って結構、自由だよっていろいろ、とかってみんな口ではいいじゃないですか？ 自分で考えろ、みたいな。

有島 はいはい。

有島 どうしてご辞めたってなんかはやらなきゃいけないわけだからね。

村田 まあ、まあ、

有島 だったらまず次を考えなよ。それで、なんかやりたらしいとかがはっきりの思えてきたら、そこからめたって遅く無んだし、せえせえ。

村田 なんて、そうかあ。

有島 と思うよ。あたしは。

村田 おー、さすが説得力ありますね、有島さん。

有島 いや、だってあたしはとりあえずご辞めちゃってあとでオロオロしたり手だからね。

村田 いま、キョドってるんですね(実演)

有島 いや、キョドってはいけい別に(笑)

場面転換。

占部の場合 3 占部と村田

以下、再び筆談のシーン。

占部と村田がくる。

村田 おはようございます、占部さん。本田もようしくお願ひします。

占部 まだ生きてたの？ 死ねって言っただろ。

村田 占部さんはどうしてこんなうんたごんたごんたですか？

占部 犯罪者だからだよ☆

村田 どんな犯罪者なんですか？

占部 殺人？ 自殺幫助？ そんな感じ。

村田 自殺幫助ってなんですか？

占部 ま、要するに殺人だよ。

村田 どうして人を殺したんですか？

占部 屈託がないなお前。

村田 よく言われます。

占部 ……どうして人を殺したのか？

村田 教えてください。

占部 信念を曲げなかったから。

村田 信念で何ですか？

占部 世の中には死んだほうがいい人間もいる。

村田 それはどんな人ですか？

占部 死にたい奴。もう十分生きてた奴。生きてくる価値のない奴。

村田 そういふ奴たちを殺したんですか？

占部 お手伝いだよ☆

村田 どうして死んだほうがいいんですか？

占部 世界を平等に近づけるため。

村田 その人たちが死ぬと平等になるんですか？

占部 そうだよ。

村田 どうしてですか？

占部 たとえば、

村田 はい。

占部 金持ちの老人を生かすために一円五万円かかるんです。

村田 ……しました。

占部 世界にはまだ飢え死にする子供がいる。

村田 なるほど。

占部 そうじゃないよ。

村田 占部さんは生きていく価値のある奴ですか？

占部 少なくとも、死刑にはならないと思う。

村田 良かったですね。

占部 残念でしたね。

村田 残念じゃないです。

占部 ウソだ。

村田 興味ないです。

占部 じゃあなんで聞いてるんです？

村田 占部さんとお話するためです。

占部 興味ないんだら？

村田 あ、占部さんにじゃなくして。死刑になるかどうかに興味がないんです。

占部 私には興味があるのか？

村田 あ、無いです(笑)

占部 仕事だから聞いてるんです？

村田 そんな感じじゃ。

間。

村田 トクですな。

占部 トクだ。

村田 はじめて意見が合いました。

場面転換。

向井が遠藤に電話をかけ、遠藤がそれに応じる。

遠藤 はい、もしもし？

向井 あ、どうも向井です。

遠藤 ああ、おつかれさ。

向井 お疲れ様です。いまちよつとどうですか？

遠藤 ああ、いいよ。どうした？

向井 切らないでくたさいよ、契約。

遠藤 わかっているよ……。

向井 はい。

遠藤 え、どういう意味だそれ？

向井 いや、別に。普通に仕事なくなったら困るじゃないですか。

遠藤 そんなことはいらないよまさか。

向井 どうしてでしょう。

遠藤 そりゃ君が続けてくれるなら、ぜひそうしてもいいからどう思うんです。うちの一番のメンツなわけだし。

向井 ええ、ならいいと思いますよ。

遠藤 だけどもあ、人事については私一人で決めているわけじゃないから、それこそ「キョウセイ」の本社とも、その、「インゲン」の方とも相談しないといけないわけだし、あなたも断言はできませんよ。

向井 有島さんもどうですか？

遠藤 もちろんです、そうするんです。そのつもりです。へ。いわはまあ、私の責任だから。

向井 ホントですよ。

遠藤 うん、これはだから、申し訳なかったと思っている。すまなかった。

向井 謝って済むんですよ、謝しても済まないうちがあのんです。

遠藤 そうだね。

向井 はい。

遠藤 だからなんというか、君からの信頼は永遠に失ってしまったものと思っているよ。

向井 はい、そういうじゃないですか、むしろ、いわは謝って済む部類の話ですよ。だって遠藤さんは別に刑務所にぶち込まれるわけじゃないんですよ。

遠藤 それはそうだし……

向井 じつは特区ですから。別に浮気も不倫も法律上は存在しない。誰が誰と何をしようが、あなたの問題もないわけですよ。違いますか？

遠藤 うん、ただじゃ入っていないの問題じゃないのはあんなにかしら、それはおもひの僕のほうで認識しておかないと、じゃあどうですか？

向井 え、悪い悪い。どうですか？

遠藤 わはそれと通じないですか？

向井 え、じゃあなごじやなごじやあか？

間。

向井 え？ やめてくださいなごじやなごじやの。ちやと聞いてくださいな。俺は悪く思ってたかったって。そしたら僕も納得しちゃうよ。上司やこいねからも尊敬して、しきあつてくるなあって思いましてあかごじ。

遠藤 すまなかつたよ。

向井 うち、そごじやなへして、あれ、聞いてんのかな人の話……。え、悪くないと思ったからやしたとてあつちむね？。ごま、あ、あつちむねってなごじや。あつちむねなかつたらあつちむねメンなんか行つての場合ごまなへなるますあつちむね、俺たつち。

遠藤 うち、君が言つてのなごじやごじや意味なのかちやあつちむね

向井 だかかあつちむねごじや。「俺は悪く思つてあつちむねごじや」ってちやとあつちむねごじやあつちむねごじや。

遠藤 うち……。

向井 あつちむね。あつちむねごじやあつちむねごじや。

間。

向井 ぶーぶー。

間。

向井 なごすか言つてなごじや。ごじやあか？ 行きますよ？ ちや、あつちむね

遠藤 俺は、悪く思つてあつちむねごじや。

向井 ハーハーあつちむねごじや。あつちむねごじや……。あつちむねごじや、なごすか言つてあつちむねごじや。

向井 あー、だからあつちむねごじや遠藤をなごじやからの遠藤をなごじや大切なごじやあつちむねごじやあつちむねごじやあつちむねごじやあつちむねごじや。

遠藤 うち。

向井 気合あつちむね。

間。

向井 そんじゃ失礼します。

向井、電話切る。

遠藤、あつちむね電話をかけ直す。

その電話に有島が出る。

有島 はい、有島です。

遠藤 ああ、もしもし。あの一、遠藤ですけど。

有島 はい。遠藤さん。

遠藤 あの一、君あれだよねその、今月で一応、契約の区切りが来るよね。

有島 はい。なんですか？

遠藤 いやだから、三ヶ月目だからその、今月で契約切れるでしょ、一回？

有島 えー、ああ、はい。

遠藤 あれ、あの一、申し訳ないんだけどさ、あの一、更新はないっていうことになったから。

有島 ……はあ。

遠藤 いやあの、僕はね、あの、反対したんだけどね。いや、もちろんその、今回の僕らの間のことで言うのは一切関係なしにね。それはもう、本当に信じてもらうしか無いんだけども。

有島 はい。

遠藤 上のほうでその、なんていうんだ、そういう人事が、決まっちゃってしまってるみたいだから。

いやあの、打ち切りになってる現場も何個かあるみたいだからさ、「キョウセイ」の本社として
も厳しいみたいでさ。誰か一人は切らなきゃいけないってことになってたんだよ、以前から。

有島 村田さんがあの……。

遠藤 うん、村田さんが？

有島 こないだなんか、あんま続ける気ない、みたいなこと言っちゃったけど。

遠藤 あ、そうなの？

有島 まあ、そんなはつきりしてわけじゃなくですよ。

遠藤 っー、でもまあ、彼女は本社からの出回りで来てるよだからさ、別に俺がどうこうして
問題でもないんだけどね、当然。

有島 ああ、はい。

遠藤 うん。

有島 じゃあ……わかりました。それはしょうがないですよね。更新の話はまあ、まああんなに
でももんね。

遠藤 そうなんだよ。うん、ホントに申し訳ないと思ってるんだけどね。

有島 いえいえいえ。それはもう本当にしょうがないですよ。ひょっとしてか？

遠藤 うん。だから、残り僅かになっちゃうんだけどさ、ちょっとあの、かとはって。有島
んせ。

有島 あ、はい。がんばります。え、それだけですか？

遠藤 ま、あとはそのーなんだ、それだけだね。

有島 ……じゃ失礼します。

遠藤 あい、おつかれさーん。

有島、電話切る。

遠藤、有島、退場。

向井 それから何も決められないままに、ただ時間だけが過ぎていきました。DNA鑑定を
かしないかが、まともな話してロロの事お話ししたい、早く早く、一年、早くも言いたいな
な一週間が過ぎていきました。

場面転換。

占部の面談室。

以下、このシーンは筆談。

向井 今日、筆談でもいいですか？ 相手、僕ですけど。

占部 あの子はびじうした？

向井 熱出ちゃったみたいで。ダウンしています。

占部 流行ってるらしいな、風邪。

向井 みたいですね。占部さんはびじうしますか近頃？ 寒くなっていますか？

占部 寒い。毎日、同じような毎日。

向井 いつもあの子とはどんなじやうを？

占部 食事とか。他愛のないじやう。

向井 どんな話を？

占部 ご飯はおいしいですか、とか。うまいわけなごじやうで。

向井 でも健康的でしょ？

占部 甘いものが足りない。

向井 甘党なんですか？

占部 ここに来て変わった。あんこなんて大嫌いだった。

向井 お酒もないですね。

占部 たまには出せばいい。

向井 そうですね。

占部 励みになる。

向井 お酒が好きだったんですね。

占部 毎日飲んでた。もう飲めない。

向井 そろそろ面会してみますか？

占部 無理。

向井 占部さんのご家族とかだったら。

占部 無理。

向井 誰となら良いですか？

占部 あの子と話してねはいい。

向井 ……いい子ですか？ 村田さんは。

占部 あんたのが詳しい。

向井 いいえ。同僚とそんなに話をしません。

占部 学生じゃなかったの？

向井 あ……そうじゃあ。
占部 本当はしゃべれるんだろ？
向井 そんなことないです。
占部 ウソだ。手話ができるない。
向井 占部さん手話ができるんですか？
占部 っし。
向井 すっし。ぶじと勉強を？
占部 ほんのっしだけ。

間。

向井 嘘をついていて申し訳ありませんでした。
占部 すべわかったからっし。
向井 設定は僕が考えました。あの子は嘘つきじゃなくです。
占部 ストレスだぞ。
向井 あの子がですか？
占部 そう。いたわれ。
向井 今度、景色のころにしよう。
占部 あの子が言いたいこと。
向井 っしはっ、おっしります。
占部 そうっし。
向井 占部さんは変わりましたね。
占部 お変わりありません。
向井 村田と話してはいますか？
占部 っし。
向井 でも印象が変わりました。
占部 あの子の言葉に、私を考えてくれているものがあった。
向井 それはどいっな？
占部 忘れた。
向井 っしか教えて下さる。
占部 思い出したらっし。
向井 待っています。
占部 あとは時間。あつし一人ごころ。

間。

占部 私は人を殺した。
向井 一緒に考えっしはっし。

占部 一人で考えていくしかない。

向井 そのお手伝いをするのが僕の仕事です。

占部 分かち合えることと、分かち合えないことがある。

向井 なんでも仰ってくださう。

占部 死んでしまった人間にそんなことが出来るのか？ 誰とも何も、分かち合えない。

向井 それじゃ占部さんがずっと一人になってしまいます。

間。

占部 今日はおしまい。さようなら。

向井 もう少しお話ししましょう。

占部 次号を待って。

向井 誤解を恐れずにあえていいいます。あなたは頑張っても「普通」にはなれません。あなたは永遠に許されない。だけどまだ、生きこむのです。

占部 ……次号を待って。

間。

向井 妻に浮気をされました。僕の話です。

占部 なんだそれ（笑）

向井 妊娠しています。子供をどうすべきかわからない。

間。

占部 殺すな。

向井、席を立つ。筆談終わり。帰り際に一礼して、

向井 失礼します。

場面転換。

佐野 いや、でもね、そういう感じじゃなかったよ。そのからってスリッパの。ね、わか
る？

門田 はい。うるうるスリッパだったんだけど、そのは、だんだん、あの、だから、自分、の中で
うるうる「じり」だったらしいな。「みたいだね、そういう理想」って言うか、そういうのが、い
あって、あの、だから実際にあった「じり」、そういう自分の中をきいてた「じり」って言うのが、い
るから、スリッパの、そのは、あったのかなあ、今では思っているよ。

佐野 なんなの気持ち悪いホント。

間。

佐野 ちゃんと鏡見なよ。ありえないから優子とあんたが付き合ってたか。冷静になって鏡見てた
らわかるでしょ？

間。

佐野 いや、だから答えなよ！

門田 はい。はい。そうです。鏡見て。鏡、すじい見ます。これから鏡だけを見て。

佐野 なにいうてるの。バカにしてんのかよあんた！

門田 いや、いや、いや、

有島 あの、佐野さんちゃん、

佐野 はい？

有島 あ、えーとあの……その……、お時間があの……。

佐野 は？ まだ始まったばかりじゃなくですか。

有島 ええ、そうですねですけどあの……。

佐野 ああ……。はいはい。

有島 ええ。

佐野 そうですか、すみません。

有島 はい。

佐野 (門田に) 良かったね。今日はもう終わらした。お礼言っただけ。

門田 あ、はい。言っただけ。

佐野 言いなよ、い。

門田 あ、はい。(有島に) ありがとうございます。

有島 うん、うん。……それじゃ佐野さんあの、

佐野 はい。じゃあ。

有島 すみません、なんか。

佐野 ああ、ごちがい。

有島 門田さん。

門田 あ、はい。ありがとうございます！

有島 立たなへていいからあなたは。

有島、佐野、退場。

門田の場合 8 佐野と有島

面談室前の廊下にて。

有島 今日もお忙しいと聞かれましたねお越しいただきまこと……

佐野 届きました荷物？

有島 あ、はい。アルバムと、CDと、日記とか、アイドルの写真集とか。

佐野 どう思います？

有島 はい。月並みな感想ですけど、本当に優しいお嬢さんだったんだなって。

佐野 そういってじゃなへてですね。え、ホントに嬉しいです？

有島 ええと、なにをでこしやう？

佐野 先生ならわかると思っただんですけどね。

有島 はい。すみませう。

佐野 本当にあたしの妹だったんでしようか？ あの、門田って男が好きだったのは……。

有島 えーと……。

佐野 どうしてもあつしの言っている妹のイメージと、優子とがしなからなごですね。

有島 どうですか……。いや、考えたことも無かったんですけどなさい。

佐野 まあ、家族の知らない部分でいうか、そういう顔していうのがもちろんあったとは思って

いますよ。あの子だったとしても、子供じゃなかったわけですよ。

有島 ええ、ええ。

佐野 でも、それにしたってどうしてもしなからなごですね。それにあつし……一回も妹の名

前呼びませぬよね？ 裁判の時がどうも。取り調べる時もどうも。

問。

佐野 有島さんの前では呼びなごですか？ 優子の名前。

有島 いや……。

佐野 呼びなごですね？

有島 そうですね。確かに。はい。

佐野 それにあの……あー、うちゅうこねはあの、私もあんまり自信のないことなですけど。

有島 はい。

佐野 あの子は全然、なんて言うんですけど、家族とは恋愛の話とか、そういうのを一切しない子
だったんですよ。だからつきあってた人とか、そういうのは全然、家族は誰も会ったことがなく
しよ。

有島 ええ、ええ。

佐野 いや、あの子の年齢だったらまだ家族に紹介するような恋人がいなくても、それはそれでおかしいんじゃないでしょうか。さあ、言わないならなんでしょうか、私にはななだかその、優子と通じ合っている部分があったりもして、だからなんでしょうか、あの子の恋愛についても私なりに理解していたつもりだったんです。

有島 はい。

佐野 さあから、いや、んー、中学生のころにはななだか男の子から告白をされてしまったこともあったみたいなんですけれど、だからそういうのじゃないのかもしれないんですけど……。だからやっぱりあの、門田とつきあってたのはやっぱり思えないんですよ。

有島 はあ……。

佐野 ああ、ごめんなさい、なんか散らかった話し方になっちゃってます。

有島 はい、大丈夫です。

佐野 あの子は、同性愛だったんじゃないかと思ってますよ。多分。

有島 ええ……そうですね。

佐野 はい。だから事件の本当のことについてはまだ全然明らかになってないんじゃないかという気がします。

有島 それはあの、裁判の時にはお話したんじゃないですか？

佐野 はい、裁判の時には何も。や、ちゃんと話しておけばよかったのかもしれないんですけど、あの時はまだ、あたしも口証には全然目を通していませんでしたし、それにあのとにかくあの子がああいうことになってしまったら、うちもめっちゃくちゃになってしまったら、だから、あたしもやっぱり頭が真っ白になっちゃってましたし、

有島 ええ、ええ。

佐野 確信は無いんですけど、今も。それにまあ、あいつが自由だったって聞いてたし、証拠もちゃんとあったわけですから……。ストーリーとしてはちゃんと出来てるじゃないですか？。だから初めは門田が犯人なんだって聞いていたのはそれなりに説得力があったっていつか、そう思ったんですけどですね。

有島 じゃ、じゃあ、あの、ちゅ、ちゅって伺いたいです。

佐野 はい。

有島 門田とは別に誰か、その、優子さんとお付き合いしている女性、がいらしたんですか？

問。

佐野 はいきりとはわからなそうですけど、でも……。はい。いたと思います。

有島 ……そうですね。

佐野 なんかちゅってトリアブルになっちゃったんですか？

有島 え、それは誰なんですか？。さあ、それはわかるんですかね？

門田 ああ。

有島 やっぱこういう時は私みたいな人間のクビ切るのが一番楽なんですよ。……。いいように使われてますよ(笑)

門田 僕もあの、いいように使われています。

有島 え、それはどういう意味？

門田 近頃あの、炊事工場で作業するようになってます。

有島 ああ、へえー。

門田 はい。

有島 朝早いでしょあれって？ 大変ですね。

門田 はい。早い時はずいぶん早い。でも、日勤と夜勤とありますよ。

有島 ふうん。体調崩さないようにね。

門田 あ、はい。

有島、向井の傍の椅子に座り、

有島 生まれてこない方がよかった人なんかいない、ってこないだ言ったじゃないですか？

門田 あ、はい。

有島 でも、産まないほうがいい人間はいるって思ってたんですね、私も……。や、こないだ子供を堕ろしました。はい。

問。

有島 あなたも一人、あたしも一人、人の命を奪ったってことになるんですかね。

問。

有島 ってなんかそんな考え方は良くないのかもしれないですけど。だって別にねえ、子供を堕ろしたのなんて私だけじゃないわけですし、そういう人はそういう人で胸張って生きていけばいいじゃないかと思ってるんですけどね……。なーんかすっきりしなへって。もやもやってしちゃって。

問。

有島 それってきつと、あたしはじつと普通を奪らしてるからなのかなって思うんですけどね。そ、そう思う。だからじつと、門田さんの方が特別残酷な殺し方をしたから、ってことになんのかもしねませんね。

問。

有島 つて変な話してごめんなさい。最後だと思ったたらなんか気が抜けちゃったんですかね。すみません。ちゃんとしています。

門田 いや、ちゃんとしてたと思いますよ。

有島 あたし？

門田 ええ。有島さんはずっと、ちゃんとしてました。

有島 ……ありがとう。

門田 うえ。

有島 ……なんかいい感じの幕切れだね。このままじゃ帰っちゃおっかなーって気もするんですけど……最後に、どっついても聞いとかないっちゃいけな〜どっついがあつて。

有島、席を立ち、ボイスレコーダーの録音を切る。

有島 じじいからは録音ナシで行きましょ。

門田 ほう。

有島 どっつですか？ 少〜は反省できました？ 門田さん。

門田 そりゃまあ……。

有島 最後なんですから、本当のこと話しましょうよ(笑)

門田 え、してますよそりゃ。なんでですか急に。

有島 あなた優子さんのこと名前で呼ぶのす〜〜嫌がってましたよね？

問。

有島 え、それってどっつてなんですか？

門田 自分の……大切な人の名前だから。

有島 本当ですか？

門田 本当です。

有島 嘘ですよね？

門田 え？ どっつてそんなこと言ってますか？ 嘘なんて別に僕は……。

有島 誰かに頼まれたんですか？

門田 え？ いや、誰にも頼まれてないですよ。え、え、なに？ 誰ですか急に。

有島 門田さんには本当に好きな人が別にいて、その人に頼まれて殺しちゃったんですか？

優子さん。

門田 いや、え？ なんだか着いていけな〜話になっちゃってるんですけど、

有島 優子さんじゃないんですよ。あなたが愛してたのっつて？

門田 いや、はあ？ ちょっとなに？ してるんですか？ やめてくださいよ。

有島 違うんですか？

門田 え、じゃあ誰だつて言いたいんですか？ 誰に頼まれたんですか僕は？

有島 誰なんですか？ ……それですよ。ええ。それを教えて欲しいんです。
門田 言うわけ無いじゃないですか。

間。

門田 もう帰ってくださいよ！ なんか気分悪いですよ。え、どうせ今日で最後なんですよ。ね。
なんですか、最後だからって適当なこと言わないでくださいよ。僕あの、あなたのストレス発散のための道具じゃありませんので。なんか、気分悪いですよホント。

有島 じゃあ、優子さんはあなたのストレス発散のための道具だったんですか？

門田 え、帰ってくださいよ。なにやってるんですか、帰ってほしいわい。

有島 なんにも言っていなかったんですね、今まで……。

門田 帰れよ！ なんなんだよ帰って言ってんだろー！

有島 どうして？ じゃあ、関係無かったの？ 優子さんは関係無かったのにあなた殺したの？

門田 あの人も……あの人も諦めたんですよ……優子さんを。諦めなければ殺しません。

有島 それで……あなたは頼まれて殺しちゃったわけ？

門田 有島さんみたいな人にはわかりませんよ。永遠にわかりません。

有島 わかるわけじゃないでしょそんなの。それだけ？ それだけの理由で？

門田 それ以上なんか必要ありますか？

間。

門田 人が誰かのために何かをしてやりたいって思うこと。その人の喜ぶ顔が見たいって思うこと。どどどが悪いんですかそれの？

有島 ……死刑でいいよ、あんたみたいなのは。

門田 だからそうやってたじゃないですか！ 僕は……。

有島 死刑でいいんだよ。あんたなんかホントに。

門田 僕もそう思いますよ。だけど……死刑にはならないですよ。特区だから。

間。

門田 やれるもんならやってみてほしいわいよ。どうせ……。

有島 するわけないでしょ。あんたとは違うんだよ。人殺し。

門田 え？ でもあれですよ、あなたも一人、僕も一人……じゃなかったらっけ？

間。

有島 うそだよバーカ！ するわけないでしょそんなこと。そうやって言っていて、あなたと同じ立場になつたらどうしよう話すかなあと思つたんだよ。

有島、書類の束やボイスレコーダーを鞆にしまい、帰り支度をする。

門田 本当ですか？

間。

門田 嘘ですよ？

有島、退場。

場面転換。

▼音響：S E 雑踏・雨

有島、向井の家。ふたりがいる。少し離れた場所に座っている。

向井 そう。

有島 うん。

間

有島 「じゅえなれろ。」「じゅえなれろ。」「じゅえなれろ。」「じゅえなれろ。」

向井 うん、うん、もう、あの……。

間。

と、向井に電話がかかってくる。

舞台上、別の場所に村田と遠藤が登場。

向井、それに……。ええ、ええ。

村田 あ、おはようございます。村田です。

向井 ああ、どうもようも。もう時間ですよね。

村田 はい。朝礼、さっき終わって。

向井 ええ、ええ。

村田 どう、しましろう？ 病欠ってことじゃないか？

向井 いや、行きますよ。遅刻じゃ。

村田 そうですか。あー、無理しないでくださいよ。

向井 いやいや、大丈夫大丈夫。あの一時間もこなさないとまずいんですよ。

村田 はい。じゃあ。お待ちします。

向井 「じゅえなれろ。」

村田 「ええいえー。」

電話切る。

有島 誰？

向井 シナちゃん。

有島 怒ってた？

向井 いや、心配された。

向井 すっぴん怖い夢だよ。俺はさっぴん、ちゅひょじの家さっぴんの家さっぴん、そのイヌさっぴんのイヌに座っているんだよ。スーッと。わうわう。

有島 ぶっぴん。

向井 それでなんか、おでんを買いたいなあと思っぴん。とっぴんのもね、買った白いはんぺんを買っぴん、それをまっ白い子猫に与えたらどうなるんだらうかと、さっぴん風に怖えっぴん。「うっ、おいしいはんぺんをうまく食べられないう猫と、はんぺんと、お互いモフモフっぴん、モフモフと格闘するモフモフみたいなの？ モフモフ名人戦みたいなの？ さぞかわいさだるうなと思っぴん。ラブリー。キューート。恋えられないう愛らっぴん。

有島 聞いたよ、それ。

向井 そうだったっけ？

有島 うん。

問。

有島 へ、それを考えていたわけね？ そのイヌに座っぴん。

向井 そう。そうなんだよ。そのイヌに座っぴん。と、さっぴん電話がかかってきっぴん。プルルっぴん。出るわけ俺。「あ、もしもしー」かなんか言っぴん。それはもしかするらさささびよんからの電話だったのかもしれない。多分そう。きっぴんさっぴんと思っぴん。「向井へーん、かわい女の予だったよー」っぴんっぴん電話だったのかもしれない。「向井へーん、今おっぴんきたたたっぴん「予っぴん」電話だったのかもしれない。わからないう。もちろんな内容なんてわからないう。だっぴん俺はね、君からのその電話に出てあげることができなかったわけだから……俺だっぴん電話に出てっぴんっぴんてたんだだけね、ダメなやり方だっただけ、俺なり、そのしもらだっぴんただだけね、だっぴん出るひらわれないんだ。絶対に出られない。だからすっぴんっぴん電話は鳴り続けっぴん。あわ？」と思っぴん。もう一回ちゃんとボタン押さなくちゃと思っぴん。何度も何度も画面を押して見るただだけ、ダメなただだよ。それっぴん……はっぴん、着信音止まっぴんっぴんっぴん。みたいなの……怖かったよホントだっぴん。すっぴん怖い夢だっぴん。

有島、自分の携帯電話を探し、見つけ出して、電話をかける。

さやあっぴん、向井の携帯電話が鳴る。

はいっぴん鳴り続ける。

有島は耳に携帯電話をあっぴん、誰かがその電話に出てるのを待っぴん。

向井はさがっぴん携帯電話を手っぴん。

浴音。

さがっぴん電話の音が止ま。

幕

【主要参考文献】

- 死刑でいいです ― 孤立が生んだ二つの殺人― 池谷孝司
- 桶川ストーカー殺人事件 清水潔
- 秋葉原事件 中島岳志
- 解 加藤智大
- 「少年A」十四歳の肖像 高山文彦
- 地獄の季節―「酒鬼薔薇聖斗」がいた場所 高山文彦
- 少年A矯正2500日全記録 草薙厚子
- 少年Aこの子を産んで…… 少年Aの父母
- 淳 土師守
- 彩花へ 生きる力をありがとう 山下京子
- 彩花へ2 山下京子
- 心にナイフをしのばせて 奥野修司
- なぜ君は絶望と戦えたのか 本村洋の3300日 門田隆将
- 消された一家 ―北九州・連続監禁殺人事件 豊田正義
- 逮捕されるまで 空白の2年7カ月の記録 市橋達也
- ドキュメント死刑囚 篠田博之
- 刑務所の中 花輪和一
- キャリア官僚になったアタシ。。。でも、挫折しました(´▽`) 後藤裕美
- 法務教官の仕事がわかる本 公務員の仕事シリーズ
- わたし、公僕でがんばってました。 古林海月
- 日本の難点 宮台真司
- 人間にとって法とは何か? 橋爪大三郎
- 無能力批評 ―労働と生存のエチカー 杉田俊介
- フリーターにとって「自由」とは何か? 杉田俊作
- 丸山眞男 ―リベラリストの肖像― 刈部直
- これからの「正義」の話をしよう。 マイケル・サンデル
- 〈対話〉のない社会 中島義道
- 悪について 中島義道
- 悪について エーリッヒ・フロム
- 新世紀神曲 大澤信亮
- ナシヨナリズムは悪なのか? 菅野稔人
- 自由はどこまで可能か リバタリアニズム入門 森村進
- 国家民営化論 笠井潔
- 死刑囚ピーウィーの告白―猟奇殺人犯が語る究極の真実 ウィルトン・アール
- 心からのごめんなさいへー一人ひとりの個性に合わせた教育を導入した少年院の挑戦― 品川裕香